解説

推進工事技士の専門知識を設計に活かす

貞永（さだなが）　桂子（けいこ）
㈱アルファシビルエンジニアリング
施工本部技術部課長代理
（推進工事技士・
1級土木施工管理技士）

1 はじめに

私は弊社技術部に所属し、16年が経過し、このような形で原稿を書かせていただくのは8年ぶり2度目となります。その間も継続して、大中口径推進工法の中の泥濃式推進工法である超流バランスセミシールド工法の積算の窓口として、推進工事に関する質問や様々な見積検討依頼に対応させていただき、気が付けば見積作成件数は累計7,500件を手掛けるまでになりました。そのため、設計コンサルに携わっている人で、私の名前にピンとくる方もいらっしゃるのではないでしょうか？もしもそうであれば大変嬉しい限りです。

少々今回の特集の主旨から外れるかもしれませんが、ここ数年の思いの変遷を記してみます。

2 現状の模索や志向

プライベートでは、前回書かせていただきました趣味のハンドボールについて、一昨年前に現役を引退させていただきました。そのため、体を動かす機会を失ってしまいましたが、その当時使用していた、未だにグリップの効くシューズ（**写真－1**）を時折手に取り、懐かしさを感じながら、何か新しいことを始めたいと思案している今日この頃です。

業務の面では、福岡本社でのデスクワークが中心でしたが、最近では設計者、発注者等へ打合せに出かけることも増えてきました。その際に必要となってくるのが、自社工法での適用範囲や対応技術の知識・ノウハウだけでなく、総合的な非開削技術への理解力が試され、推進工事技士の試験を通じて学んだ様々な内容が、とても役立っている状況となっています。また、通常業務のほとんどは社内での積算業務と工法問合せへの応対となりますが、推進工事技士の取得により、工法問合せに関しては、相手との会話もスムーズで、自身の言葉が理解されているとの安堵感を得られています。おそらく、試験勉強を通じて得た知識と実際の現場状況を写真だけではありますが、考え、悩みながら、数多く目にすることで、私自身の記憶に刻まれ、あたかも体感経験したかのような状況となり、身に付いてきたのではないかと認識

写真－1　冬眠中のシューズ